

かんばるっ子



源内 寛己君(12)
落合町阿部

135cm。7月8日、津山陸上競技場(津山市)で行われた第22回全国小学生陸上競技交流大会岡山県代表選手選考会・走り高跳びで、優勝した落合小学校6年・源内君が出した記録です。

「大会本番で自己新記録が出てびっくり」と源内君。6月3日の備北大大会での予選会では、115cmだったのが、県大会でいきなり出した大記録でした。大会まで学校の休み時間、放課後に練習してきた成果です。

小学生の走り高跳びは、はさみ跳びといって、足を高く振り上げてバーを越し、足から着地します。源内君がこの競技を始めたのは、体育の時間にみんなより高く跳べたのがきっかけです。

体育館での練習では、大の仲良し、同級生の島田聖史君がマット出しなどを手伝ってくれました。島田くんは「いっぱい練習してもらって、記録をもっと伸ばしてほしい」と陰で支えます。

『跳べ、より高く』 —走り高跳びで全国大会へ—



校舎に貼ってある同小学校のこれまでの記録は133cm。源内くんは何とかこれを超えたいと、目標に頑張ってきました。

「バーを壁と思って助走の力を一気に上に跳ね上げ、跳べ」。放課後指導に当たる担任の宮本章弘教諭(88)の声が体育館に響きます。

「競う相手がいれば、励みにもなり、記録も伸びやすいのですが。今は自分との戦いですね。全国大会では、自己記録の更新を目指して楽しんでもらいたい。めったに行ける大会ではないですからね」と、指導にも熱が入ります。

源内君は、「跳べた時は、気持ちいい。全国大会では精一杯力を出して、自己ベストを出したい。140cmは跳びたいです」と話してくれました。

全国大会は8月26日、東京・国立競技場で開催されます。



NPO法人 ふれあいの里・高梁
理事長 小見山節夫さん(69)
(浜町)

「この虫なあーに？」

「トンボを捕まえたよ！」

目を輝かせ、歓声を上げる子どもたち。7月22日に「高梁美しい森」で行われた昆虫観察会の一場面です。

主催のNPO法人「ふれあいの里・高梁」は、平成7年に旧高梁地方振興局の呼びかけで組織されたボランティア団体「高梁地域美しい森づくりの会」が前身。より自主的に自分たちの思いを形にする活動を進めようと今年3月にNPO法人を設立。市内外の約50人と6団体の会員で活動しています。

植樹や枝打ちといった森林の保全活動のほか、野鳥観察会や炭焼きなど、里山を活用した自然体験活動にも力を入れています。理事長の小見山さんは「自然に親しむことによって、自分たちを取り囲む自然の仕組みを知り、生き物との共生や自然環境を守ることを考えてもらえればいいですね」と話されます。

今回の昆虫観察会もこうした活動の一環として企画されたもので、市内をはじめ、県南からも多くの家族連れが参加。倉敷市から親子で参加した常藤颯太くん(6)は「昆虫採集は初めてだったけど楽しかったよ。雌

自然に親しみ 自然を知り 自然を守る



7月22日に行われた昆虫観察会の様子

のシヨウジョウトンボが採れたし、来年もまた来たいな」とうれしそう。観察会のスタッフとして参加していた会員の大倉節子さん(64)は「山登りが趣味で自然を守るため何かできればと思ひ、会の活動に参加しています。自分のできるかぎりのことを続けられたら」と話されます。

同法人では、今後もキノコ観察会など、さまざまな企画が計画されています。また民間企業と連携した森林整備などの活動にも取り組んでいます。「里山を再評価し、次の世代に引き継いでいくためには、人材を掘り育てていくことも必要です。私たちの企画に多くの皆さんに参加してもらおうことで、活動の輪が広がっていく」と小見山さん。

NPO法人「ふれあいの里・高梁」のこれからの活動が期待されます。

「人間力」を磨く ビジネスコミュニケーション学科



社会学部ビジネスコミュニケーション学科
教授 高橋 正己 (学生担当部長)

自分から心を開いて気持ちよく挨拶が出来なければ、仕事の相手とはうまく行きません。ポイントをおさえた会話や対応が出来なければ、それまでうまく運んでいた仕事さえ断られるかもしれません。

学生の就職のために開かれる企業懇談会の席上で、会社の人事担当の人は「人間力」を「足腰がしっかり」と表現

しながら、しばしば「元気で明るい足腰のしっかりした学生を送ってください。専門的な知識や技術は入社してから教えます」と話されます。いつの時代でも現実には「厳しい」のですが、この厳しさに立ち向かうかこそ「人間力」と言えます。とりわけ「厳しき現代」の仕事にはこれが不可欠なので、当学科の学生には「人間力」を身に付けて卒業してもらいます。

もちろん、ビジネスには専門知識も必要ですから、社会学をはじめ経営学、組織論、情報処理、メディア論、地域デザイン論などを勉強します。また、学生が「人間力」を磨くために当学科には、自分の意見を主張したり議論したりしながら少人数の学生が切磋琢磨するゼミナール（演習）があります。また、仕事の現場に出掛けて実際に作業を体験したり、現場の人を大学に招いての講義もあります。その他にも、話の聞き取りが困難な人が講演や会議に参加できるように、学生がボランティアでパソコンやネットワークを利用したデジタルノートブックサービスを行ったり、高梁地域の自然と文化あるいは歴史的伝統を含めて取材し、それらの記事を一冊にまとめた『いぶき めぶき』を編集したり、現場での活動を学生自身が展開しています。

■問い合わせ 高梁学園広報室 フリーダイヤル 0120-25-9944/e-mailアドレス : koho@kiui.ac.jp

編集後記

長かった梅雨も明けて、夏本番になってきました。8月2日には高梁市の最高気温が36.1度(平年32.2度)を記録し、この日は全国で一番暑い日だったと新聞が報じていました。合併後、夏のイベントが盛りだくさんになりました。市内には「成羽愛宕大花火」、「川上マンガ絵ぶたまつり」、「備中たかはし松山踊り」の3枚のポスターが並べて貼ってあって、まさに「高梁三大まつり」といったところでしょうか。

そのほかにも各地域での納涼祭など、地域ならではの趣向を凝らした催しがめじろ押しです。先日、備中町の「夏祭りin西山高原へ子どもを連れて行ってきました。地元の人によるステージ発表の後、県下でのイベントでしか見れないというレーザーショーがありました。夏の夜空に描かれる大音響の光のショーは圧巻で、「夢の国のよう」と子どもの感想。ぜひ、来年も行くことにしました。これから開催のイベントも、まだまだあります。足を運んでみてはいかがですか。また企画運営等に携わる皆さん、暑さに負けず頑張ってください。(NK)

吹屋は私の生きがい



吹屋ふるさと村

村長 長尾有子さん(7)

お話し 聞かせて

私は吹屋というまちが好きです。まちを訪れた人たちに吹屋のことを話すことが私の生きがい。吹屋のことを考えていると次から次へと話が膨らみます。また、全国町並み保存会の関係で全国各地へ足を運び、その地域の文化や自然と出会い、自分のまちならどう

活用できるか置き換えて考えたりすることも楽しみの一つ。ほかに興味でベンガラ染めやお茶、陶芸などをしていきます。今年から吹屋のまちを観光周遊バスが運行しはじめ、休日の観光客が増えました。しかし、ほとんど市外のお客さん。もつと市内の人が吹屋を訪れて町並みの美しさや歴史を知ってほしいですね。いろいろと苦労はありますが、地元で吹屋を盛り上げていく「器」をつくり、市内の多くの人や吹屋を訪れる人たちが、行政や観光に携わる人が、その器に「飾りつけ」をして、みんな吹屋を盛り上げていければいいですね。